令和元年度第１回総合教育会議の開催結果概要

【日　　時】　令和元年８月２９日（木）午後３時００分～午後５時００分

【場　　所】　三豊市危機管理センター２０２会議室

【出 席 者】

(1)　構成員

職名		氏名
市長		山下　昭史
教育委員会	教育長	三好　覚
	教育長職務代理者	細川　芳樹
	委員	則久　郁代
	委員	山崎　市子
	委員	堤　重尊

(2)　事務局

職名			氏名
政策部	部長		綾　章臣
	地域戦略課	課長	石原　一也
		課長補佐	伊藤　睦子
		課長補佐	篠原　栄司
教育委員会事務局	部長		岩本　茂幸
	教育総務課	課長	豊島　智
	学校教育課	課長	山下　昌茂
	スポーツ振興課	課長補佐	牧　昌志

【傍 聴 者】　なし

【会議次第】１　開会

２　市長挨拶

３　教育長挨拶

４　協議事項

(1) 三豊市教育大綱の策定について

(2) あらゆる学びの場の提供について

(3) 三豊市子ども未来応援ネットワーク（仮称）の構築について

(4) その他

５　閉会

【議事要旨】

発言者	内容
地域戦略課　石原課長	それでは、定刻がまいりましたので、これより令和元年度第１回総合教育会議を開催いたします。なお本日の会議は地方教育行政の組織及び運営に関する法律第一条の四の６により公開することとなっております。 それでは、まず、はじめに三豊市長　山下　昭史よりご挨拶申し上げます。
山下市長	挨拶（略）
地域戦略課　石原課長	続きまして、三豊市教育委員会教育長　三好　覚よりご挨拶をお願いします。
三好教育長	挨拶（略）
地域戦略課　石原課長	協議事項に入る前に、本日の会議の議長の選任をお願いしたいと思います。この会議の議長は、三豊市総合教育会議規程の第３条第２項において「議長は、市長または市長が指名した者とする」となっております。また、平成27年度の総合教育会議において会議の議長は、会議の内容によって決めることになりました。市長、どのようにいたしましょうか。
山下市長	教育長にお願いして、会議を進行していただけたらと思いますが、いかがでしょうか。よろしいでしょうか。
各委員	異議なし
地域戦略課　石原課長	それでは議長には教育長が選任されましたので、これよりの進行につきましては三好教育長にお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。
三好教育長	それではご指名をいただきましたので、議長を務めさせていただきます。それでは、会次第に沿って議事を進行してまいります。まず、協議事項の１番「三豊市教育大綱の策定について」の協議になりますが、大綱の策定について事務局より説明をお願いします。
教育総務課　豊島課長	説明（略）
三好教育長	今回の教育大綱策定にあたりましては市長さんのお考え等も十分反映させていかなければいけないと思っておりますけれども、ここで三豊市教育大綱の策定につきまして、市長さんの方からまずお考えをお聞かせいただければ

	と思いますが、いかがでしょうか。
山下市長	はい。教育大綱ですが、資料２の中に重点と書かれている部分の中で今回特に取り上げさせていただいた部分は、最近よく話の中で出てきますが、文化芸術、文化財の分野でいうと、郷土歴史・文化の分野になるのでは思いますが、少しびっくりしたのは、最近の小学生か中学生だったかと思いますが、高瀬町で出た銅剣・銅鐸の話とか、詫間の航空隊の話とか、知らない子が多い。銅剣銅鐸は、高瀬町二ノ宮から出て、国立博物館に所蔵されていることとか、紫雲出山から竪穴式住居跡が出たのも知らない。今は学校で郷土の歴史を総括して教えるところ、見せるところがないのではないでしょうか。これはどういうやり方があるのか分かりませんけれども、郷土歴史の中でそういったものを教えているのでしょうか。
三好教育長	一番、現場に近い細川委員さんどうでしょうか。
細川委員	それは郷土歴史ではなく、社会科の地域学習で部分的には出てきます。私だったら地元の三野町の文化財とか。三野町の小学生が高瀬町とか豊中町のこととかはあまりやらないです。自分たちの住んでいる地域についての学習はします。
山下市長	地域学習があるのは知っていますが、三豊市民としての歴史、例えば、三野町の子が高瀬町で銅剣銅鐸が出たことは知っていてほしい。知るべきだと思います。詫間航空隊は近代歴史になると思いますが、あまりにも知らなすぎと感じます。小学生に聞いても知らない人が多いですね。詫間航空隊の二式大艇は世界で唯一、鹿屋市に現存しているのも知られていません。自分たちのルーツを知るというか、あまりにも地域学習が身近すぎて、自分たちが住んでいる三豊市ってどういうどんな歴史があるのかを知らない。例えば、仁尾の八朔人形祭りがなぜあの時期にやっているのか。そういうのを、過去を知って、自分たちの歴史を知って、次の世代へ繋いでほしい。
三好教育長	今は小学校の社会科で中学年ぐらいですかね「私たちの郷土」っていうのがあったと思いますが。
細川委員	今あるかは把握していません。
山下市長	詫間町の民俗資料館は詫間のものだけですよね。全体のそういうのが必要かなとも思います。授業で教えるというよりも、博物館的にそんな大掛かりなものでなくてもいいと思いますが、すごく感じます。

細川委員	詫間の民俗資料館に年１回、通学学習で行きますが物がいっぱいあってどれを見ていいのか分からないぐらいの状態です。スペース的にももうちょっと広い場所があってもいいと思います。
山下市長	物理的な問題と、体系的に教えていくっていうのも必要と思います。私たちは、銅鐸が琴平カントリークラブの３番ホールの池の端から出たという話を大人から聞かされた記憶があります。大きな意味で言うと教育大綱の郷土歴史の分野。あと三豊の子たちにできるだけ多くの選択肢を与えてあげたい。知らなかったというより、こういう選択肢があることをできるだけ早く教えてあげたい。都会がすべてとは思いませんが、あまりにも選択の余地が少なくなっています。あらゆる機会をとらえて、すべての子どもたちがいろんな問題を抱えた子供たちもいますが、あらゆる選択肢を与えてあげたい。最終的には子供たちが選べばいい。選択肢が多いほうが夢の広がりが大きくなる。夢の持ちようが違う。スポーツであったり、文化芸術であったり、そういったものを教育大綱にいれたらと考えます。
三好教育長	今、市長さんからありましたが、やはり子ども達は自分が住んでいる三豊市いわゆる郷土の歴史そのものをあまり知らないのではないか。もっと郷土、三豊市そのものを知ってもらう、そういったことに目を向けてもらえる子どもを育てていかなければいけないとか。やはり子どもに将来に対しての選択肢、色々な機会を与えられるような状況を作り出していくことが子どもに夢を持たせなければいけないとか、そういうことが大事なんでないかとか、いうようなお話があったところですけど、委員の皆さんからご意見を賜りたいと思います。いかがでしょうか。
則久委員	教育大綱について調べてみました。県とか市、教育委員会とかに連絡して確認しました。６か所のうち、政策部が関わっているのが２件、あと４件は教育委員会が主導権を持っているのがありましたが、三豊市はどういった体制で作られますか。
地域戦略課　石原課長	冒頭でも申し上げましたとおり、総合教育会議につきましては、政策部地域戦略課で担当をさせていただいております。政策部を中心に教育委員会も連携して、教育大綱の改定策定に取り組んでまいります。
則久委員	会議の日程を確認しましたが、次の第２回のあとパブリックコメントと早い展開になっていますが、この時間で会議を終えることができますか。もっと市民の声とか聞かずしてこの会議にかけていくのでしょうか。

地域戦略課　石原課長	則久委員よりいただきました会議の回数とかにつきましても、この会の中でご意見いただいた中で、より良きものにできたらと思いますので、皆さんの意見を賜りたいと思います。
則久委員	分かりました。会の様子を見ながら意見したいと思います。
細川委員	さきほど市長がおっしゃられた地域の文化を知って地域学習に興味を持って学習するのは大事です。しかしながら、実際には宗吉の瓦窯跡とかにすっと行ってすぐに見学できるような足ですね。そういったことができれば現場は非常に助かる。毎回、バス会社に交渉して相当な費用を払って行くのはなかなか足が向きにくい。いろんなことに興味を持ってその場所を見学に行けるような状況にできれば非常にありがたいなと思いますけれども。
山下市長	行政バスはどうでしょうか。結構頻度持っているのでしょうか。
教育総務課　豊島課長	原則的には学校の行事については使えないようにはなっています。スクールバス（山本や財田にある）に関しては時間の空いた範囲においては、お互いの学校の調整をして、経路の変更の申請を上げて移動利用ということであれば使えるが、登下校の時間を外してとなるので時間的な制約はあります。
山下市長	何かいい方法はないですかね。
堤委員	例えば小学校とか特に春の遠足とか秋の遠足とか、新入生を迎えた遠足とか。例えば春の遠足は、地域の紫雲出山とか瓦の里館とか、ポイントを決めて、地元を知ってもらうということで、学年に１回は必ずそこを回るコースを考えてもよいのでは。どっちみちバスを雇っているので。それで回るコースでもいいのではないでしょうか。
山下市長	一番実現可能かと考えます。
三好教育長	小学校の場合、低学年は校区から近いところを歩いて行く方法を取りますし、中学年・高学年になるとちょっと遠くまで出かけていく。細川委員さんがおっしゃっているのは一つの社会科の学習とかで地域に出かけていく学習というのがあるわけですけど、それの足がないのでそこが一つのネックになっていると。結局、バスとかも市が所有していても使えてないという状況で、どこの市町も同じだと思うが、通学バスについては使えないので、学校独自にバス会社と交渉して使っている。

山下市長	それが理由で社会科学習できないのも本末転倒な気がします。
堤委員	私が子供の時も地域を教える副読本があった。地域はこういうものですよと教えるものがあったが、そういったものを作って子どもたちに与えるということも必要かと思いますが。
山下市長	授業は社会科ですか。副読本はありますか。
三好教育長	堤委員さんが言われているようなものは、「私たちの郷土」という副読本は、社会科の教員が中心になって作っているのがあります。それで、三豊市、観音寺市では三豊市にかかわったようなことは学習している。
堤委員	市長のおっしゃっていたことはある程度網羅しているのですか。
学校教育課　山下課長	今の副読本ありますので持ってきます。
山下市長	教えるか教えないかのレベルって全然違うじゃないですか。
山崎委員	先ほどスクールバスで移動する案がありましたが、こちらから行くだけでなくて、来てもらう方法はないのでしょうか。例えば、今の時代は人の動きがとても広くなっているので、ずっと三豊市内で生まれ育った人がいるわけではないので、例えば移住者であるとか、平日は仕事をしている拠点でいて、土日だけ別の場所で暮らしているような２拠点生活者の人も、この地域の人にとっては、こっちの人という認識でいますが、そういう人たちから何か学ぶとか。あと移住者の完全に移住してきた人は暮らしがゼロからのスタートですから、幼稚園・小学生のレベルから、ここはどういう町なんだろうというところを勉強しますから、そういうのも入れて、組み込みながら一緒に学んで行くとかあるのかなと。
山下市長	出前授業はいいかも。
三好教育長	郷土の歴史の副読本ですが、これは平成 31 年 4 月発行と新しい。市長さんがおっしゃった三豊市の郷土の歴史については学んでいると思っていただければと思います。結局は実際の現場に行くときは、足の問題が課題としてはある。ここにかいてあるように郷土について学ぶのは中学年。高学年になると日本の歴史を学ぶ。今は低学年で社会科ではなく生活科になっているので３年生で学ぶ。

山下市長	社会学習。もう少し限られた範囲で学習できれば。
細川委員	もう少し、歴史的なものというか地域のことを学べるように
学校教育課　山下課長	副読本は４年に１回改訂します。教科書の副読本ということで教科書に沿って作っています。もう一つは県が作っている「ふるさと教材」。これは郷土の人物を中心にまとめています。
則久委員	大久保諶之丞とか。三豊に貢献した人とか、市の副読本にがそういったものは載ってないですよね。
三好教育長	学校によってはそれぞれの地域に郷土史家的な人がいて、そういった方に学校がお願いをして郷土の歴史とか人物について学んでいる。 時間もあるので、あと市長からできるだけ子ども達に多くの選択肢をというお話しが出ているところがありますが、そういったところについても時間を取りたいと思いますが、ご意見ありますでしょうか。
細川委員	高瀬のサッカー場でカマタマーレ讃岐が練習して、選手から指導いただけるチャンスがあると。これはものすごいプラスになるなと。このような取り組みは非常に大事であると思います。ただサッカーに限らず、ほかのスポーツでも三豊市の出身者で有名な方の指導を受けるチャンスがあってもいいかも。例えば、卓球で前田美優さんとか。
山下市長	サッカーは象徴的だったので先行的にしたが、おっしゃる通り各スポーツに広げていきたい。バスケットとか。中学校の部活動が成立しなくなってきたのでクラブチーム的なもので、せめて練習でもさせてあげたい。中体連は学校単位でしか総体には受け入れない。これだけ部活動が教員の働き方改革で成立しないのに。勉強で頑張りたい子には環境はありますけど、スポーツで頑張りたい子には、地方はすごく不利だと感じます。それは単に大人の都合だと思う。指導者がいないとか。水泳はクラブチームというかスイミングクラブとかが充実してきたけど。サッカーだと部活に入って、学校終わってクラブチームに行くとか。そうゆうのは大人が変えていかなければ、環境を整えてあげなければいけない。カマタマーレ讃岐の教室には３人来てくれた。３人しかですけど。推測ですけど、すでに部活をしている子はやめてまではいけない。内申もあるし。変えてあげたい。勉強したい子は塾とかあって選択肢がいっぱいあるが、スポーツに関してはない。これを変えてあげたいですよね。

則久委員	地域の中で人数が必要なバレーとかバスケットとか野球とか、そういうスポーツが成り立たなくなっている。やりたい子ができなくなっている。ぜひ、なにか学べるものを。
山下市長	例えば、中体連の要件が変わらないのであれば、例えば、豊中中学校にはバドミントン部がないがクラブで全国大会いく子はいる。その子たちが練習だけでもできるようにする。総体には豊中中学校で出さしてあげるような、許容を持たせてもらえないのかな。
堤委員	体協がありますが、地元でも週に１回とか親子でするバドミントンを体育館でやっています。若い時にやっていた人が教えに来て。剣道とか柔道でも、部活動がなくても子ども達に教える環境はある。学校の体育の先生に学校サイドとしての問題があるのであれば体協の指導者を活用してもよい。もう少し指導できる人のレベルアップ。体協あたりとの協力体制もとれるのでは。今回、市にもスポーツ振興課ができたので、体協とのタイアップとか子どもをまきこむような組織変更もとれるのではないでしょうか。
山下市長	子どもたちは指導者につくんですよ。全国大会に連れて行ってくれるような先生に。ただ中学校の先生は事務的に異動になる。バレーの指導者として評価の高い先生がバレー部のない中学校に異動するとか。そうなるとクラブチームなり体協ベースで。でもう中学校の部活はいいのかなといっていいかも。教員だって経験のないスポーツを教えるのは悲劇。そこまでしなくていい。お互い悲劇。
山崎委員	中学生の場合は、部活に占める生活の割合は大きいが、人数が少なくてチーム編成ができない場合、例えば、中学校の野球部ではチームができないので物足りなくて、土日は高松のクラブでしている子もいる。学校も行く、部活も行く、クラブも行く、学校生活でなかなか大変。メディアの影響かもしれませんが今サッカーが盛んで、けど、私が聞くには子どもたちはバドミントンやりたい子が多いかなと。先ではそういった子にも、例えば、桃田選手に教えてもらうとか。
山下市長	子どもの選べるチャンスはスポーツに限らない。ピアノでも。三豊で誰が教えられるのかをちゃんとすればいい話であって、桃田選手、中学校以降は福島ですから。間違っても香川県ではないよね。それでオリンピック出たら騒ぐのはおかしいけど。結局、何を三豊の子にしてあげられるかですよね。親も大変。土日は高松に連れて行ってあげて。親もへとへと。それはやはりさ

	らに上を目指す子は確実にいて、その子がさらに上を目指す環境が三豊にはないということはありますね。
堤委員	ある意味、芽を吹かすことだけさして、あとは高校で力の強い高校へいく。そういう部分で取り掛かかりの芽を吹かす部分に重視してもいいのか、指導であるレベルにまで上げていくのがいいのか、というところに問題があるのかもしれないですけど。
山下市長	そこの判断は、その子その子や親の判断による。新たな指導者を求めていく。これはしょうがない。ただ今の状況は、目さえ吹かせてあげられない。本当にやりたい競技ができない状況もある。
三好教育長	だいたい委員さんのご意見では多くの選択肢を子ども達に与えるという意見が多かったかのように思います。サッカーについては今年一つ立ち上げられましたが、子ども達が中学校でどうなっているのかというと、中学校でも、この指導者がいるからこの学校に行きたいと。区域外でも。体協でクラブチームを作ってもなかなか集まらない。指導者を選んでいるところがある。親もよく知っている。例えば高松商業の長尾監督にしてもそうですが、中学校の教員だったのですが、高松商業で引っ張られて。長尾監督のもとでやりたい子が集まるわけで、地域でクラブチームを立ち上げるにはいい指導者が必須。それから中学校の部活動は自由選択になってきているところが多くなってきている。なので、必ずしも部活動に入ってなくてもいい。ただ中体連の関係で、部活に入ってないと総体に出られないという問題はある。 そういった中で三豊市においては、市長さんのお考えでは、いろんなスポーツ、スポーツに限ればいろんな輪を作ってあげれば、子ども達の夢が一つ実現できるのではないかということです。
三好教育長	それでは、続いての議題に移りたいと思います。議題２「あらゆる学びの場の提供について」協議を行いますが、資料について事務局より説明をお願いします。
学校教育課　山下課長	母国語教育、映画スクール　説明（略）
スポーツ振興課　牧課長補佐	地域プロスポーツ団体や地元出身選手との交流　説明（略）
地域戦略課　篠原課長補佐	プログラミング教室、環境学習　説明（略）

山下市長	今、5 項目させていただのも、先ほどの子どもの選択肢を増やすのも大前提としてありますが、子どもから高齢者まで知的好奇心というものは全く衰えない。プログラミング教室もそうですけど、財田に行くと 70 歳の人が私も行ってきたでと。これは教育からちょっとずれるかもしれませんけど、三豊全体を学びの場とひとくくりにすると、すごく人が集まってきてくれる実感があります。特に子どもが中心にはなってきますけれども、こういったものがあるということを知ってもらうことは、次の好奇心を呼び起こしますので、タラジャパンなんかそうですけど、世界中を回っている海洋探査船のマイクロプラスチックに関する調査結果をリアルタイムで教えることができる。そういうのは、他にはない三豊だからできる学びの場を作ってあげるのがいいのかなと思います。
三好教育長	何項目か具体的な施策面からご提案いただきましたがご意見をいただけたらと思います。
則久委員	母国語に関してですが、教員向けの研修に 17 名が参加したと書いてありますが、みとよメソッドをするなら、もっとたくさんの先生にかかわってもらわないと、この先生はいいけど、この先生はできてないことになるので、教えてもらう先生の教育は大事だと思います。次に、タラ号に関して、マイクロプラスチックの問題がありますが、海をきれいにしていこうというもう一つの課題がありますが、大きなことをする前に地道なところから、海に囲まれた三豊市ですので、海岸を次々と回っていくようなボランティア清掃だとか、身近なところから取り組んでいくのも大事かと思います。私が以前、豊島で海外清掃をやりましたが、三豊市ってそうゆう活動ってあるのかなと。タラ号の時にもこういった提案をさせていただいたが、その後どうなっているのかな、こういたところから子どもたちを巻き込んで地球を大切にしていこうということを、子どもたちも身をもって体験するのが大事と思います。この中にはなかったですが、先ほど市長がおっしゃったいろんな体験をしていくという中で、文化施設、マリンウェーブを使って、著名人を呼んで文化活動を行ってという文化芸術の活動を進めていくというのがありますが、マリンウェーブのみならず、地元の人とか県内の人とか有名になっている人はたくさんいますのでそういった方たちに講師になってもらって、小中学校の体育館に呼んで、その人がどういた経緯で今あるのかを講演してもらったら、遠くのことのような芸術ももっと身近に感じられる場所が、マリンウェーブに限らず、学校でもそういった活動をしていくといいと感じました。

三好教育長	私が思い描いているものは、例えば母国語教育ですと、今、地域おこし協力隊の小玉さんに教育委員会に籍を置いていただいておりますが、うまく小玉さんの力をお借りしたい。母国語教育を推進していく上でも、今は点の活動にしかなっていないと思っていまして、夏休みを利用して何名かの子ども達を指導してとか、何名かの先生たちに集まってもらって指導するとかだけではなくって、例えば三豊市全体でやっていこうとするなら年間を通しての計画が必要になってくる。また、拠点を設けることができないかなと。例えば、南と北に小学校一つ中学校一つとか。そこで協力していただける先生方が核としておいでると。その先生を中心に研究なりを進め、ほかの先生方も授業を聞きに集まってくるとか。それを年間通してやっていける計画を作れないかと思っています。9月に一週間に一回ぐらい協議しながら、今からの2年間、3年間を見越した母国語教育推進についての計画ができればと考えています。せっかく、小玉さんという優れた指導者がいますので、一緒になって推進する計画ができればと思います。国語は授業の上でも一番難しいと思います。国語力いわゆる言語能力はすべての学習の基盤になってきますので、そういった力を子ども達にどうつけていくかということがいると。論理的な思考力に結びついていくと思います。
堤委員	国語力は私も孫の関係で体感しますが、紙芝居、読み聞かせ、この影響力はすごいなと思う。生涯学習課で頑張っていますが、もっともっと人数を増やしていただきたいなと。なんで3歳の子からこんな言葉がでてくるのかというその表現方法にびっくりする。今の3歳児、4歳児あたりの国語能力をつける基本的な部分っていうのは、やはりとっかかりの紙芝居とか絵本とかを徹底して取り組むべきと考えます。以前に市長がおっしゃっていた、保育所から小学校に上がる子と幼稚園から小学校に上がる子とか。今度のこども園構想で3歳ぐらいから徹底することで、今、本当に驚くほど絵本も充実していまして、すでに道徳感とかいろんな感覚を含んでいます。小学校に入る前につけるべき要素だと考えます。幼稚園でもそういった部分に長く時間をとるとかするほうが、スムーズに小学校の国語に入れると思います。日本語にはいろんな表現が言葉に含まれていますので非常に重要だと考えます。
細川委員	堤さんと同じ意見。小学校なんかだったら各地域に読み聞かせグループがあります。そこで絵本だとか紙芝居だとかを15分程度ですが、ほぼ低学年ですが読み聞かせをしている。そうするとその時の語り方によって、子どもの心が育ってくる。道徳的な内容も小さい子どもの中に言葉で伝わるので、そうゆう活動は非常にありがたいなと思います。そういうやりかただと無理なく普通の活動に入っていけると。今年、国語のサマースクールをやられたが、

	直接、中学生でそうゆうことに興味がある子、そういう能力がある子に、さらに専門的内容で指導していける学ぶチャンスを作ったのは価値がある。まず、全体的なレベルを上げるというのも大事ではありますが、最初はそういったことに興味がある子たちのレベルを引き上げるのに取り組んでいくのも大事と思います。先ほど教育長もおっしゃられていましたが、まだ点でしかないと思います。教員向けの研修会も最初の年なので 17 名でしたが、参加した教員から良かったという雰囲気がまわりに伝わっていけば次の年は参加者が増えていくと思います。先生自身もいい刺激になると思いますので続けてほしい。
山下市長	読み聞かせとか紙芝居とかもものすごく効果的だと思います。子ども達に対して満遍なくやりたいですね。ある一手の段階にそういった専門的な人たちにお願いするというのもいいと思いますし、どうやっていったらいいかなんですけれど。母国語を学ぶというところで専門性を高めるのは大事。実は映画スクールで脚本に採用された中学校１年生の香川さん。ふるえた文章がありまして、駄菓子屋のおばあちゃんの印象を伝えるときに、「猫背のおばあちゃんが店の奥に座っている。」認知症が出ているという表現を使わないんですよね。この一文ですべての描写が出来上がっている。この表現はふるえた。中学校１年生が使える表現力を超えていましたね。やっぱりそういった感性を持っている子たちはいっぱいいて、小さいころに培われたもの。その子は小説家になりたいと言っていたので、自分なりに勉強はしていると思うが、目を開かせたのは何なのかは知っておくべき。
堤委員	国語の中でも短歌とか俳句とかいろんな分野がありますけれども、例えば、中学校では弁論大会がありますが、母国語の発表の場として、作文とかいろんなものを募集した中で文化的な市長賞とかあげる機会はどうか。運動であれば市長杯とか市長賞とかありますが。
山下市長	そういうのもいいと思います。今後考えてみたい。この映画スクールのシナリオにあるような表現をみんなができるようになればいいなと思います。
山崎委員	国語は答えが一つではない。いろんな答えがあって、いろんな引き出しが必要だと考えます。そのためには様々な角度での学習が必要になってきます。引き出しを作っていくという地道な作業で国語力ができてくる。教科書を見る機会がありましたが、音楽の教科書に「ひなまつり」が載ってまして、「お内裏様とお雛様、ふたりならんですまし顔・・・」という歌詞がありまして、この歌詞だけ見るとお内裏様が男の子、お雛様が女の子と捉えるのですが、実際は違っていたんですね。お内裏様は上段のふたりを指す。文部科学省で

	もいろんな審査があると思いますが抜け落ちていた。歌詞を作った人も間違えと言っていました。言葉は難しい教育だなと。この曲は時期になったら、いろんなとこで流れますけど、一人ひとりが意識しないといけないのかなと。
細川委員	あまりにも有名になりすぎて。変えられない状況になってしまったんじゃないかと。ひとつ、日本語の魅力的なところは、一つの事象をとっても表現の仕方がいろいろありますよね。その表現の仕方が大事かと。その部分を多くの子ども達に学んでほしい。最近のテレビで俳句を素人が作って、プロが直すという番組がありますが、いつも感心させられます。この年になっても必死で見ます。それぐらい魅力を感じる。大事にしていかないと。
則久委員	資料１が大綱のたたき台ですか。
教育総務課　豊島課長	これは施策的なものなので、これを包括的にまとめて大綱にしないといけない。資料１は大綱としては細かすぎるのでこれを包括的につつきこむことを考えている。あくまでたたき台です。政策部と協議して教育委員会で作ります。
三好教育長	最近は本屋さんが危機的な状況に感じ、合わせて子ども達の読書離れが進んでいるように感じます。そういった面でも国語の語彙力とか、感性的な部分も含めて弱くなって来ているのかもしれないです。国語の力をどうやってつけていくかが課題になってきていると思います。今ここにある学びの場の提供をどのような形で大綱に盛り込んでいくかを考えていかなければなりません。時間も限られておりますので、続いての「子ども未来応援ネットワーク」について市長お願いします。
山下市長	この「子ども未来応援ネットワーク（仮称）」ですけど、昨年のこの会議でホワイトボードに書かせてもらったものですけど、子ども達の教育、妊娠期から高校生まで、いかに縦割りかっていうことを私の意見として出させていただきました。その後、具体的に何をするのかっていう部分について決めてまいりました。妊娠期から 18 歳、高校生は県教委の問題がありますので妊娠期から 15 歳になるまで、来年度からやって行こうと思っています。何をやるかというと、妊娠期、いわゆる母子手帳をもらってから子ども達が 15 歳になるまで、我々は三豊市の子ども達は責任を持って見守っていくということ。内容的には、子育てをしていく中での様々な問題があります。その中でも発達障害、児童虐待、貧困、居場所等の様々な問題を抱えている子ども達をできるだけ救い上げたい。できるだけ手を差しのべたい。今現在も様々な

	グループの方が市内で活動していただいていますが、そのネットワークを作りながら、結論から言うと、何か子どもたちに問題が起こったら、ここに電話すれば何とかなるという、ワンストップでその子ども達を救い上げることができる組織を作りたい。これを来年の4月にスタートさせたいのですけど、その核になるのが今年発足した子育て世代包括支援センター。これは、0歳児から就学前までの子ども達を見守ろうという組織で、県の指導もあり、全国的なもので作りましたが、三豊市の場合はこれを18歳まで拡大します。この子育て世代包括支援センターが中心となって、例えば、子どもの居場所づくりネットワークの皆さんが、0円キッチンとかいろいろやっていただいていますが、そういったところに来た子ども達に何か問題があった場合、例えばネグレクトとか、その子の抱えている問題は一番最前線でいる人たちが分かります。学校であればソーシャルワーカー。その子がおかしいと感じた時にセンターに連絡して、センターのスタッフが対応し、差配します。例えば、虐待の可能性がある場合、事態の把握ができた時点で警察に連絡するとか。今まではいろんな組織でたらいまわし的になっていたかもしれない部分を情報キャッチからワンストップできる組織を作ります。冒頭にも申しましたが、妊娠期から18歳までの子ども達を縦割りでは見ないで、一貫して三豊市の子ども達を見守る組織を作ろうとしています。例えば、よくあるのが就学前は何ともなかった子が、就学後に発達障害を発症することもある。これまではこの子が発達障害になる前はどういった子だったかが分からない。ので、市としては、三豊市に生まれたすべての子ども達の状況データを、小学校、中学校まで継続して持っていく仕組みを作ろうとしています。これだけのネットワークを作りますので最大限漏らさずにやりたい。潜在的な子たちもいる。虐待を受けている子も発覚しない子たちもすべて拾い上げる。最初はうまく動かないかもしれないが、皆様方やNPOの皆さんにご説明申し上げ、賛同いただきたいと考えています。来年4月からスタートしたい。
三好教育長	3番目の大きな議題で三豊市子ども未来応援ネットワークの構築という事で、資料をご覧いただきましたら中心になる包括支援センターにすべての情報を集めてくる。そこでワンストップという言葉を使われましたが、そこがコーディネーターの役割を担うと。
山下市長	警察とか自治会とか組織に入って子ども達を見守ってもらいたい。そういうすべての組織が子ども達を見守る。ただ高校って難しい。市の施策の効力を発揮できるのは。コミュニティスクール化してもいいかも。法律はできたのでやりやすいかもしれませんが。

三好教育長	今、子ども達が直近で抱えている大きな課題を解決する組織を立ち上げていこうということでありますが、それについてご意見はありますでしょうか。
堤委員	私も教育委員になってすごく思ったのは、保育所や幼稚園の先生方にすれば、小さいころから子どもを見ている中で、あの性格の子は小学校、中学校から高校生になって、どう育っているのかをフィードバック的に知るシステムが現状はありません。市長が考えられたネットワークの中でフィードバックできれば、小さい頃はどうだったかが検証できれば、次回同じような場面での対応が違ってくる。今、全国的にもいろんな事件が起きていますが、あの子は幼稚園の時どうだったか、小学校の時にどうだったかというのがフィードバックできれば、うまく指導ができるのではないか。安全な地域を作るためにも役に立つ。あの時に変な形に進まないように、こういった指導していたらよかったとか後悔しない。そういった要素も、この中にはまってくれればと思う。
山下市長	一番大事なのが小学生で発達障害とかが出たときに、幼稚園時代にどうだったかたどれなかった。守ってあげる状況を作りたい。何かあった時にセーフティーネットになるものを。一番思うのは、虐待があったときにどうしても事後反省になる。あんな悲惨なことを。各部門は精いっぱいやっているけど、結局言われるのは救えなかったのかとか。今、救いましょうよ。同じ温度を持った人で 18 年間見守っていくこと。これが重要と考えます。
細川委員	非常にありがたいシステム。子どもに何か問題があったときに、たらいまわしになるのではなくて、そこへ行ったら専門的なところへ繋いでくれるのは、安心して連絡もできるし、その子がうまくいくような方向に繋いでいってもらえたらしてもらえたらありがたい。
則久委員	今まで何かあったとして、例えば中学生で何かあったときに、その子が幼稚園の時にどうだったと話して連携とかができると思いますが、責任の在り方は、幼稚園とか小学校で切った場合に担当が違う先生になってきているということが問題だと思います。この基本というのが、同じ人ができたら関わっていけるのが大事だと思います。近所のおばちゃんとかの感覚で子どもが、今こうなっているねとずっと見守っている人がいれば、これがすごく生きてくると感じます。
山下市長	それが理想ですよね。基本はそういう姿勢で、それを補完するためのカルテを継続して中学生まで上がっていく。これが必要ですよね。

三好教育長	今、機構を立ち上げていこうという段階でしょうけど、子育て世代の包括支援センターの周りには、発達時障害児支援ネットワークとか、子どもの居場所づくりネットワークとかありますが、具体的にはどういった人に包括支援センターに関わってもらってコーディネートしてもらうか。どういった人材を抽出してくるかがひとつは課題だと思います。動き出したときに、もう一つは実動部隊として働く組織が必要かと思います。例えば、子ども食堂とか、子どもの貧困って教育の力で解決していく道はあるだろうなと。そういったところに、みとよ寺子屋とか子どもの学習を見る場面が地域にあるとか、そんなのがまわりにあって、包括支援センターと連携してできないものかと考えます。
山下市長	包括支援センターの周りにある6つの組織ですけど、これ自体もネットワークを作っていかないと。発達障害児支援ネットワークとか、児童対策に社協が入っている部分だとかは一つの組織としてやっていきますが、地域もそうですけど、そういう組織の認識があって、あらゆる方が、この子と思ったときにセンターに電話するというネットワークが必要。これも年度内には進めていく。スタートなので完璧かどうかは別として、最終的にはセンターを、幹を太くしていくのが重要と考えます。
三好教育長	そういった構想で今から具体化していくという事です。その他で何かございますか。
堤委員	文化的なものがマリンウェーブと言われているが、機能していないような気がします。例えば、市の文化祭としても、あの状況ですので。それぞれの個性を伸ばしていくのを考えると、例えば市の施設でひとつ作ってほしいと思います。各公民館でやっていますが、もっと別の、展示もレベルの高い指導もできる文化拠点がほしいなと思います。もう一点。One MITOYO と市長が言われていますが、文化協会で展示部門の発表とかあるけど、体育協会も One MITOYO で考えるのであれば、市の運動会を市全体としての盛り上がりができるのでは。そういった企画も考えてほしい。
山下市長	文化拠点ですが、郷土の歴史をわかるような博物館的なものは、グランドデザインの中の一つで考えていますが、将来的に博物館的なもの、大きくなくても美術館的なものも一つ欲しいなと考えています。美術館で個展も開けるような多機能でというのは、これから考えていけばいいですけど、三豊市の所有している作家さんの分散しているものを常設展示で見られる場所は必要だと思います。そこが文化の発信拠点になると思いますので、それは今後グランドデザインの中でやっていくべきことだと考えます。2 点目の体協で

	すが、おっしゃる通り、ひとつでまとまってやるのは必要だが、体協の音頭とりは市がやるのではなく、体協の中で盛り上げていただいて、足並みをそろえていくのが重要かと思います。市がやるというのは今まであまりいい傾向ではないと。体協がまとまります。それに市が応援していく方向がいいかな。祭りも同じですけど、こちらから声をかけると総論賛成、各論反対になるので、それなら体協が足並み揃えていく中で、市がサポートしていくのがいいと思います。
三好教育長	時間となりましたので、ここですべての議題を終了させていただきます。長時間にわたってご協議いただきありがとうございました。ここで議長を引きたいと思います。
地域戦略課　石原課長	それでは、閉会に移らせていただきます。閉会に際して山下市長より一言ご挨拶をお願いします。
山下市長	挨拶（略）
地域戦略課　石原課長	ありがとうございました。以上をもちまして、令和元年度第１回総合教育会議を終了させていただきます。次回の総合教育会議につきましては、皆様方の御予定を確認・調整させていただいた上で、事務局より連絡させていただきますので、よろしくお願いいたします。長時間に渡りご協議いただきありがとうございました。

三豊市総合教育会議規程第６条第３項の規定により、ここに署名する。

令和元年 10 月 4 日

三豊市長 山下昭史

三豊市教育長 三好覚